

音のでるペン・絵本を用いた小学校における英語授業デザイン

A Proposal for English Classes in Elementary School -With Sound Pens and Picture Books-

佐藤 久美子^{*1}, 島村 雄次郎^{*1}, 横山純子^{*2}
Kumiko SATO^{*1}, Yujiro SHIMAMURA^{*1}, Junko YOKOYAMA^{*2}

^{*1}玉川大学大学院教育学研究科（教職専攻）
^{*1}Graduate School of Education, Tamagawa University
^{*2}旺文社
^{*2}Obunsha Co., Ltd

Email: kumi@lba.tamagawa.ac.jp

あらまし：旺文社で開発された「音のでるペン」を用いた英語教材（『ハッピープラネット』発表者佐藤が総合監修）を小学校での英語活動に応用し、英語が教科になる2020年を視野に入れた、次世代型小学校英語教育・指導法を提案するものである。今回使用するポスターやワークシートは旺文社が開発し、小学校教員がこれを使った実践授業を紹介する。企業、大学の研究者、小学校教員が協力し、これからの英語教育・学習環境デザインを提案する。

キーワード：音のでるペン，英語絵本，小学校，次世代型，英語教育

1. はじめに

2011年度より、小学校5、6年生において英語教育が必修化となった。楽しい英語活動を目指し、ベネッセの2013年の調査によると、7割近くの子供たちは英語の授業に満足しているという。一方で、小学校によってはALT（Assistant Language Teacher）がもっぱら主として英語で教えていたり、担任が英語と日本語を使い教えたりと、内容にはかなりばらつきが見られる。担任が教えている場合は、児童の気持ちを察し、楽しめるコミュニケーション活動を取り入れることができるが、英語の発音自体に自信のない教員が多い。英語の単語・フレーズや発話力に、限りがある。ALTが教えている場合は、子どもが実際に興味を持つ場面や必然性のある会話場面の構築に、問題が多くみられる。

しかし、2014年、文部科学省から2020年には5、6年生は英語が教科化になり、3年生から必修化という方針が発表された。少しでも、全国でばらつきのない、子どもが興味を持ち、かつ、必然性のある場面設定を行い、担任の発音問題を解決する教材、指導法の開発が急がれる。

そこで今回は、小学生の英語教育で大いに推進される絵本を用い、かつ、「音のでるペン」を用いてこの絵本を指導する指導法、教材を提示することが目的である。すべての絵本に含まれる単語、フレーズを触れるだけで音のでるので、担任の発音不安が解消される。さらに、絵本を読み聞かせるだけでは終わらずに、電子黒板と音のでる英語ポスターを使用し、必然性のある会話場面を設定しながら、子ども

が話したいことを表現する指導法を紹介する。

2. 「音のでるペン」の開発上の工夫

本研究に用いた音声ペンは、児童が使用するテキストに特殊な印刷（ドット状のコード）を施し、そのコードをペン先端の光学センサーで読み込むことで、プログラムを起動する仕組みになっている。児童は紙面をタッチするだけで、聞きたいときに、聞きたいだけ、ネイティブによる良質な英語のインプットが可能となる。

外国語活動を行う際の課題の1つは、児童に英語の音声聞かせる機会をどれだけつくれるかということである。ALTが常に授業に参加できるのが理想であるが、現実的には学級担任だけで進めることが多くなると考えられる。英語の発音に不安を感じている教員にとっても、音声ペンによる英語音声のインプットは授業運営に自信と余裕を与えると考えられる。

また、児童が使用することを意識し、ペンの電源を入れた後は、紙面をタッチするだけで動作するように、簡単な操作性を追求した。ペン本体には電源ボタンと音量調節ボタンのみ搭載しているので、操作を間違えることもない。安全面では、欧州玩具安全規格(EN71)に合格しており、小学生も安心して使える仕様となっている。

なお、本研究で用いた音声ペンは、録音機能、ゲーム機能も搭載している。楽しいアクティビティを通して英語を身につけることを重要視しながら、音声ペンの録音機能で英語の発話を自然に促す、インタラクティブな教材を目指し、開発した。

3. 「音のでるペン」での一斉授業の可能性

小学校の外国語活動は、子どものコミュニケーションの素地を育てるためである。そのために必要なのは子どもが英語を話したくなる状況を教師が意図的に作り出すことである。

外国語活動の主活動の大きな流れは、①状況の設定②単語練習③ダイアログ練習④アクティビティとなる。最終的にはアクティビティの段階で子どもが自信を持って話すことができるように授業を組み立てる。そこで大切なのがダイアログ練習である。

3.1 ダイアログ練習

図1は旺文社の教材である。日常的な生活の場面が漫画になっていて、音声ペンでタッチすると英語が聞こえる仕組みになっている。ダイアログ練習は「教師対児童」→「教室の左半分対右半分」→「男子対女子」→「隣同士」と大勢から2人組へと、よりリアルなコミュニケーションに近づけていく。しかし、一斉授業の隣同士のペア練習になると、教師は全員をゆっくりと指導する余裕がない。そこで、音声ペンを活用するのである。



図1 旺文社英語絵本

ペアに1枚、ダイアログのシートと音声ペンがあると、発音など不安なところをその場で確認することができる。更に図2のように情報量を抑えた吹き出しにすると、役割が明確化されたシートになる。

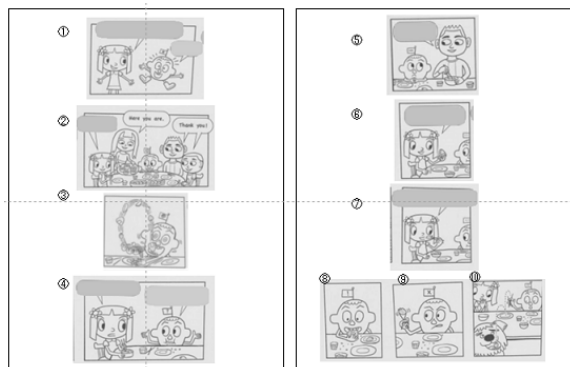


図2 吹き出しつきポスター

3.2 視覚的情報と音声情報

小学校の外国語活動は原則文字の指導をしないため、ダイアログ練習の際、子どもの視覚的な情報を与えるために、吹き出しやイラストを使うことが多い。絵本を理解させるには、この視覚情報プラス音声情報の両方を与え、児童にも、この両方に注意を払うように指導することが大切である。最後に、児童がその発達年齢に従い持っているであろう、背景の知識が使える場面を含む絵本を与えれば、より理解しやすくなるであろう。そこで、日常生活の場面の中で、日常生活で使えるフレーズを導入することで、実際の生活でも早速使うことが可能になり、身近な体験や経験を話すという目標にも近づくことができる。

3.3 教師のための教材

さらに、音声ペンは、教師の教材研究用にも活用できる。現在、小学校で使用している副読本「Hi, friends!」(文科省)には教師用の指導書がある。指導書とは別に音声CDが付いてくるが、教師が教材研究をしようとする、そのCDを聞く必要がある。小学校教師は毎日全教科を教えているため、実は、教材研究の時間を十分に取ることができない。そこで、音声ペンで指導書をタッチし、音声が必要なだけ聴ければ、教師の教材研究が格段に楽になるのである。

3.4 アウトプットにつなげる表現活動と実践授業

音声ペンで音がインプットされ、それを児童が反復・模倣し、会話に慣れることが容易にできる。そして最後に行くことは、模倣で終わらずに、音のでる本やポスターで学んだ表現を使い、自分たちの話をする、すなわち、アウトプットすることである。コミュニケーション力の育成とは、学んだ表現を正しく繰り返すだけではなく、自分の経験や身近なできごと、話したいことを表現できること、皆の前で堂々と話せることで身につくのである。このメディアを使った授業を従来の指導法で行った授業と比較し、児童の表現力にどのような差がみられるのか、その実践授業の結果と成果を今回発表する。

今後、音声ペンと電子黒板という新しい教育媒介を用い、さらに、担任の工夫と授業力を合体させることで、2020年を視野に入れた、学習効果が高い、かつ、楽しい授業が推進できると期待している。

参考文献

- (1) 佐藤久美子(総合監修)『ハッピープラネット』旺文社(2014)
- (2) 佐藤久美子(編訳)『小学校英語：指導法ハンドブック』J.ブルースター&G.エリス、玉川大学出版部(2002)

Characters/Artwork©2013 Rodney A. Greenblat/I.P.